

「信州 知の連携フォーラム(第4回)」報告

わがまち・わが館 お宝情報発信術 -信州ナレッジスクエアの育て方-

篠田 尚利 (県立長野図書館)

1. はじめに

2020(令和2)年は、新型コロナウイルス感染症が世界中を席卷し、甚大な影響を及ぼし続けたことにより、長野県でも多くの博物館・美術館、図書館、文書館などの文化施設が休館を余儀なくされた。そんな状況の中、6月4日「信州 知の連携フォーラム」¹⁾は「一過去・現在を未来へと架橋する「知のインフラ」を考えていくために-」とするメッセージを発信した²⁾。

このメッセージでは、「信州 知の連携フォーラム」が「信州における価値ある地域資源の共有化」と「新たな知識化・発信」について議論を重ね、その成果を形にした「信州ナレッジスクエア³⁾」を軸に、今後も新しい「知のインフラ」のあり方を考えていくことが宣言された。

信州知の連携フォーラムは、長野県における知と学びに関わる各種文化施設(博物館、美術館、図書館、文書館などのいわゆるMLA)が、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策についてフロアを交えて語り合う場として2016年に発足し、過去に3回のフォーラムを開催してきた。

第3回フォーラムからは、各施設がリレー形式で企画・運営を担うことになり、第4回フォーラムは、デジタルアーカイブの構築・活用に携わるための基礎的な知識の獲得を図るとともに、MLAの枠を越え、人的なネットワークを作ることを目的として、県立長野図書館(以下、当館)が企画し、9月28日(月)、県立長野図書館「信州・学び創造ラボ」、塩尻市立図書館「多目的ホール」及び信州大学附属図書館を会場に、「信州知の連携フォーラム(第4回): わがまち・わが館 お宝情報発信術 -信州ナレッジスクエアの育て方-」⁴⁾が、県立長野図書館、長野県信濃美術館、長野県立歴史館、信州大学附属図書館の主催、長野県の後援により開催され、91名が参加した。

2. 開催概要

2-1. プログラム

第4回フォーラムのプログラムは以下のとおりである。

第1部 信州ナレッジスクエアを知る

槌賀 基範(県立長野図書館)

第2部 「信州サーチ」の未来設計 -これまで考えたこと、これからのこと-

講演 吉本 龍司氏(株式会社カーリル)

第3部 ワークショップ

分科会① 「信州サーチ」どう育てる? (@県立長野図書館)

分科会② 避けては通れない権利処理問題（@県立長野図書館）

分科会③ 発信するお宝を探そう（@塩尻市立図書館）

2-2. 参加者数

表 1. 所属別

	美術館・博物館	歴史館・文書館	図書館	その他	合計
人数	9	2	74	6	91
%	9.9	2.2	81.3	6.6	100

表 2. 分科会別

	①		②		③	前半のみ	合計
人数	31		24		23	13	91
会場別内訳	県立	信大	県立	信大	塩尻		
	20	11	16	8	23		

2-3. 実施体制・開催準備

第4回フォーラムは、「信州発・これからの図書館フォーラム」（主催：県立長野図書館）、「令和2年度 著作権講座」（主催：県立長野図書館、長野県図書館協会）、「図書館職員人材育成研修会」（主催：長野県図書館協会）、信州大学附属図書館職員研修を兼ねている。

開催にあたっては、当館内で館長を始めとする職員が企画に携わり5名による事前打合せ、講演者との内容打合せを行った。その後、オンライン会議システムを使用して各館の館長と担当者による事前の打合せ会議を行い、企画内容の協議、広報の方法や今後のリレー式ワークショップについて意見交換が行われた。

3. 実施内容

3-1. レクチャー 『「信州ナレッジスクエア」を知る』

テーマにも掲げられている「信州ナレッジスクエア」について、当館職員より以下の説明が行われた。

「信州ナレッジスクエア」とは、「信州」という窓からさまざまな情報を入手し、世界を再発見し、未来をつくるための「知の広場」として2020年3月に新たに構築されたポータルサイトである。

長野県の総合5か年計画である「しあわせ信州創造プラン2.0 学びと自治の力で拓く新時代」を実現するためにエンジンとなる「学び」の推進や県民の情報を探索・理解・選択し活用す

「信州 知の連携フォーラム（第4回）」報告 わがまち・わが館 お宝情報発信術 -信州ナレッジスクエアの育て方-

る力（情報リテラシー）の向上、「第3次長野県教育振興基本計画」にある「共に学び合い、共に価値を創る」こと、情報資産の蓄積や様々な主体が所有している情報を相互活用すること、誰もが使える情報基盤を整備するという目標を実現し、信州に関する情報を誰もが広く手にすることができるように、「信州の知の情報基盤」として構築された。

構築にあたっては、国立情報学研究所の高野明彦教授や株式会社カーリルと連携協定を結び助言を得ながら開発が進められた。

現在は、「信州サーチ」「信州デジタルコモンズ」「想・IMAGINE・信州」「eReading信州学」「信州ブックサーチ」の5つのポータルで構成されている。

今後は「信州デジタルコモンズ」をプラットフォームとして使用しながら、独自公開したアーカイブを「信州サーチ」の検索対象とするなど、新たなコンテンツの公開方法やデータ設計の仕様などの検討が必要である。

3-2. 講演 『「信州サーチ」の未来設計 -これまで考えたこと、これからのこと-』

株式会社カーリルの吉本さんより以下の内容でご講演をいただいた。

「信州ナレッジスクエア」特に「信州サーチ」について一緒に考えたい。もともとは信州を検索できるようにしたいという依頼を受けて、手始めに図書の検索として「信州ブックサーチ」をスタートさせた。まずは本だけじゃない検索をどう構築していくのかを考えていきたい。一般的に文化・知識を検索するということがあまり経験されていないので、「信州ナレッジスクエア」で検索するということをイメージすることは難しい。そんな中で何ができるかを考えたい。

図書館等は従来から、あることが分かるように検索システムを整えてきた。またそこにアクセスできることを保障してきた。その上で、活用し新しく再生産できることを目指していくべきだと思っている。

まず第一歩としては、「あることがわかる」ことが大切なので何を探すのかを考える必要がある。信州に関する情報を信州以外の機関が持っていることもある。検索範囲を考えることは非常に重要になる。何を検索するのかを考えるためには、塊（コレクション）をつくる必要がある。この部分はまだ固まっていないので皆で考えたい。そもそも検索には集中型と統合型があり議論されてきた。カーリルは技術的にお互いの良いところを取ることで議論を終わらせることを実践してきた。今は実践的な技術的解決方法が見えてきている。

ただし一般的には、様々な検索サイトが恣意的に検索することに慣れてきているため、違った情報を集めて検索しても上手くいかない。検索サービスは、探せるということ以上に、何を上位に表示するのが重要になってきている。この点では「信州サーチ」は全くできていない。信州を検索したときに、どんな並び順で表示するのか議論が進んでいない。

かつて検索は非常に高コストだったが、今は多くの基礎技術が共有され誰もがオープンソースで検索できるようになってきている。また、横断検索に関する技術も見直されてきている。検索サイト同士が繋がることでより民主的な検索ができるようになってきている。こういった技術を

使うことで博物館が思う並び順、美術館が思う並び順、図書館が思う並び順というようにもっと自由になっていいのではないか。

そんな中で、「信州サーチ」はどこを目指していくのか、ユーザーの選択の余地を作っていくのかを議論し、これからはどんなサービスにしていくのかを皆で考えていきたい。カーリルはベンダーではない。長期的なミッションを据え、現実的な取組を行いながら、一緒になってサービスを作っていきたい。

その上で、何が検索できるべきなのか議論していかなくてはならない。今の技術やシステムにこだわらず、何を検索できるべきなのかを考えることで課題が見えてくる。その課題をクリアするためにはどういう技術が足りないのかが分かってくる。足りない技術をどのように開発するのは一緒に考えていきたい。

どうしたら検索できるのかということには答えがない。何ができるのか、どうすべきなのか一緒に考えていきたいというのが答えになる。今後は各機関の検索サービスがGoogleでも検索できるようになってほしい。

信州サーチと連携することにどんなメリットがあるか考える必要もあるが、それぞれの機関が自分たちでどんなことができるのかを考えていってほしい。今後は無断で使われることを増やしていく必要がある。公開して検索できるようにしておくだけで意外と使われる。

検索のニーズを広げ、新しい知識を生み出していくことが重要なミッションになる。そのためにはコラボレーションのスピードを加速する必要がある。オンライン会議のシステムを活用し議論を活発化していってほしい。

これからも、信州サーチが長く続くことで当たり前のインフラとして認知される状況を作っていきたい。

3-3. ワークショップ

分科会①「信州サーチ」どう育てる？（県立長野図書館 信州・学び創造ラボ）

講演講師の吉本さんにも参加いただき、今後信州サーチをどう育てていくのが議論された。様々な機関からの参加者から、今持っているものをどう検索対象にするのかなどが話し合われた。やりたいことは色々あるが、まずは目録を作ることで検索もしやすくなる。そうすることで信州サーチに参加する機関を増やしていきたいという意見が出された。また今後「信州ナレッジスクエア」の相談窓口を作ってほしいという要望も出された。

分科会②避けては通れない権利処理問題（県立長野図書館 ナレッジラボ）

信州大学附属図書館長の渡邊先生から問題提起され活発な議論がなされた。著者権者の権利を守ることは重要だが、何でも使用禁止という風潮もある。また図書館でデジタルアーカイブを作っていく上で、古い写真では肖像権の問題だけでなくプライバシーについて今後問題になってくるなどの意見が出された。権利処理の問題は正解がないので、自分たちの問題意識とし捉え一緒に考えていくことが確認された。

分科会③発信するお宝を探そう（塩尻市立図書館 多目的ホール）

まずは、それぞれが何を持っているのかを確認してみる。持っているものをデジタル化していくだけでなく、それぞれの興味を伸ばしていくという考え方もある。県立長野図書館への要望として、どこかと連動してコレクションを作っていく、そのプロセスを公開していくことで参加しやすくなるという意見が出された。

信州大学附属図書館分科会①

信州サーチにどのようなコンテンツを入れるのかと、検索結果をどう表示させるかの2点が議論された。信州大学として公開できるコンテンツとしては、文献検索をするためのテキストやパスファインダーやブックリストが挙げられた。また、大学教員の研究データの公開も考えられるが、長野県に関することに限定するのかといったことも議論された。検索結果の表示については絞り込みやソート機能を充実させることでニーズにあった検索になるという意見があった。

信州大学附属図書館分科会②

著作権だけでなく、所有権や公衆送信権などについても議論されたとともに、各学部からの事例紹介などもあった。今後はCCBYやCC0が求められている中で学術目的であれば使える方向を何らかの方法で広げていく必要があるという話になった。

4. おわりに

参加者に依頼したアンケートでは、多くの前向きな回答が得られ、参加者の満足度が非常に高いフォーラムになったと言える。各ワークショップにおいても、非常に活発な意見交換が行われ、MLAの枠を越え人的なネットワークを作るという当フォーラムの目的も少なからず達成されたと思われる。

また、コロナ禍において集合型のイベント開催が難しい中、会場を分散しオンラインで繋ぐことで今まで以上に多くの参加者が集まったことは今後のフォーラムのあり方を考える上でも重要である。講演講師の吉本さんが言われた、コラボレーションのスピードを加速していくためにも、オンラインミーティング等の活性化は今後必要となるであろう。ただし、各機関のネットワーク環境の整備など、まだまだ解決すべき課題は多い。今後、信州ナレッジスクエアを充実させていくためにも、まずはできるところから始めていきたい。

次回のフォーラムは長野県立歴史館が主催となって企画・運営されることとなっている。今後ともフォーラムを始めとした様々な機会を通じて、各機関が相互理解を深めるとともに、情報を必要とする各機関の利用者や地域住民と共に模索しながら、MLA連携のあり方を見出し、実践していくことを期待したい。

最後に、第4回フォーラムを開催するにあたってご協力いただいた、講演講師の株式会社カーリルの吉本さん、ワークショップ会場を提供いただきました塩尻市立図書館の皆様に深く感謝を申し上げます。

注

- 1) 信州知の連携フォーラム

<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/mezasukoto/torikumi/mlaforum.html>

- 2) 「信州 知の連携フォーラム」メッセージ

https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/news/osirase_200604.html

- 3) 信州ナレッジスクエア

<https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/portal.html>

- 4) 第4回 信州知の連携フォーラム

https://www.knowledge.pref.nagano.lg.jp/now/mezasukoto/torikumi/mlaforum_202009.html

※当フォーラムの発表資料は、信州大学学術情報オンラインシステム（SOAR）[https://soar-ir.repo.nii.ac.jp/](https://soar.ir.repo.nii.ac.jp/) において公開されている。